硝子細工と駄菓子達

N.T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

硝子細工と駄菓子達

【Ｎコード】

Ｎ９１９２Ｒ

【作者名】

Ｎ．Ｔ

【あらすじ】

日本は昔、南北朝に分かれたことがありましたね。つまり、天皇が二人いた時期があったのです。今いる天皇。そして。

その裏に、昔のように国を統べる天皇。

裏の天皇家「富樫家」に生まれた紗綾（さあや）。完璧な人間だが、身体が弱い。

彼は今、死刑囚。

富樫家に仕えてきた一族「高田家」。長男は長年仕えた紗綾が囚人となったとき、家を捨てた。

長男は今、刑事。

――僕は何もしなかったよね、お父様。なのにどうして、僕は自由になれないの？

――あいつは何もしてないのに、何故あいつは囚われ続けないといけないんだ？

今こそ、錆びた鎖が外れるとき。

注）これは短編集です。時系列ばらばらに書いているからです。割り込み投稿しますが、それだけ言っておきます。

蜉蝣はビー玉になりたい

>i20763—28807<

「——何考えてんだ？」

紗綾（さあや）を扇いでいた手を止め、彼の額に乗っている手拭いを取ったとき、俺は紗綾の目が外に向いていることに気づいた。外は今、一年の中で最も騒がしいのではないかと思うくらいにぎやかだ。

「ん、外に、出たいなと」

やはり。今日は祭りが行われている。

「紗綾、お前バカか。真夏に高熱出して、床から起き上がることすら出来ないヤツが何言ってんだよ」

紗綾はもう一週間以上床に着いていた。熱は高く、夏の暑さも相まって食べ物を受け付けない。前、やっとのことで食べ物と呼べるものを口にしたのは三日前のことだ。当然体力もがくんと落ちた。

口だけは達者なままだが、声に少しずつ張りが無くなっているのが、長年の付き合いで分かった。

「高田くん、今日はお祭りだよ？久々に家を抜け出して、色々見たいと思ってたんだ……」

熱が高いために気が緩んでいたのだろうか。紗綾はいつも無表情であるその顔をわずかに歪ませ、小さく溜息をついた。

そう。紗綾は家から出ることを許されていない。小さい頃からずっとそうだった。たまに外出を許されたときも、俺が絶対に御付（おつき）としてついていた。そうでなければならなかった。

「……行けないもんは、仕方ねえだろ」

「そうだね。あーあ、つまんない。——そうだ、高田くん」

「何だ？」

「お金渡すからさ、いつもみたいに買ってきてくれ。みぞれ玉。他にもさ、君がいいと思うものを。多分、食べられると思うから。今はいつもの離れじゃないから、行くのは簡単だろう？」

紗綾が上がらない手をずるずる引きずって、財布がある場所を示す。浴衣から伸びる腕はひどく白くて、とても細くて。
胸が締め付けられるような感覚に襲われる。
白く細い腕をまた床の中に戻し、手拭いを水に浸したあと、絞るのと同時に声を出した。
「分かった。買ってくる。女中さんもちょうど来たし、代わってもらおう」
手拭いを畳んで紗綾の額に乗せる。俺がたすきを外し、袖を直して立ち上がると、女中が氷水をたらいに入れて部屋に持ってきた。氷枕を取り替えるのだろう。
「いってらっしゃい」
紗綾が小さな声で、そう言った。
俺は下駄をつっかけ、じりじり焼ける日差しの中を駆けた。まずは駄菓子屋。
「おい、おばば！みぞれ玉っ！」
肩で息をしながら言うと、しばらくしてかくしゃくとした老婆が出てきた。おばば。この村の人全員からそう呼ばれている。
「なんだい。祭りの日も紗綾様と一緒か。ん？紗綾様は、身体の具合が思わしくないようだねえ」
「もう一週間以上も寝付いたままさ。ずっと四〇度くらいの熱が続いてて、何も食べられなかったんだが、今やっとなんか食べるって言ったから」
実を言うと少し違う。食べられないわけではない。食欲は普通にあるのだ。しかし、大丈夫だろうと食べさせてみると。
全部戻してしまうのだ。
三日前に受け付けたのは飴湯一杯。それだけ。食欲があるからお腹が空いたのは分かる。気持ち悪いわけでもないから、食べさせても良いように思う。でも、食べれば吐く。話している途中にお腹空いたと言われても、騙し騙しに水を飲ませることしか出来ない。惨い仕打ちだと思う。

「紗綾様はみぞれ玉がお好きだからねぇ……。いつも通り、一袋でいいんだね？他にも何か」
おばばが周りを見回し、一つのものを手に取る。
様々な色、さまざまな大きさの玉が入った、こぶし大の黄色いネット。
「前はおはじきを買って行かれただろう？だから、次はビー玉、ってのは」
紗綾はガラス細工が大好きで、たくさん蒐集している。
いいかもしれない。
「買う。おばば、気ィきくじゃん」
代金をきっちり払い、また走る。次は、神社。祭りが行われている表に、浴衣の裾がはだけるのも構わずに走る。親父がいなくて本当によかった。もしここに親父がいたら、頭を一発殴られて延々と説教が続いたに違いない。『お前には富樫家に仕える者としての誇りが無いのか』とか、『お前の行動が紗綾様の風評に関わるのだからな』とかなんて。
神社に着いた頃にはすっかり息があがり、日陰で膝に手をつき、息を整えた。
「おっ、タカじゃん。今日はお勤めじゃなかったっけ？」
クラスメイトの三上だ。嫌な奴と遭遇してしまった。三上は話し出すと止まらないという悪癖を持っている。しかも、聞いている相手を絶対に逃さない。捕まったが最後、夕方まで帰ることは出来ないだろう。紗綾が待っているのに。
「すまん、三上。俺、お使いの途中なんだ、またあとでな」
さっさとその場から立ち去ろうとすれば。
「つれないこと言うなって。そんなに急がなくても、祭りは逃げない！」
――手前（てめえ）から逃げたいんだよ！
内心はそう思う。口には出さないが。
「いえ、紗綾様が頼まれたものですから、急がないといけないんで

す。女中に任せてきてしまいましたし」
仕事の口調で切り抜けようと試みるも。
「紗綾様だって気を利かせてくれたんだって！使用人思いの主人、いいねえ」
「とにかく、私は急いでいます。仕事の邪魔をしないで下さい！」
「なんだよー、いきなりかしこまって。ほらほら、あっちに……」
何を言っても聞く気は無いようだ。こういうときは親父にいてほしかった（さっきの言い分と矛盾しているのは重々承知している）。しかし、親父は現当主のところでお仕えしている最中。当主は祭りの間、ずっと村人と交流している。そんなときに御付（おつき）が主人の元を離れるなど、ありえない。
仕方ない。
「かざぐるま、どこで売ってますか？」
どのように店が並んでいるかも分からないのだ。三上には案内役になってもらおう。紗綾の好きそうな物を買うための。
＊＊＊＊＊
「あ、りんご飴一つ。姫りんごで」
「はいよ、タカ。紗綾様は、どうなんだい？」
「まあまあってとこですかね」
紗綾が気に入りそうなものだけを買った。かざぐるまに始まり、お面、ぽっぴん、わたあめ、水笛、その他色々。お祭りらしく、かつ、涼しげなものを。これくらいでいいだろう。もうそろそろ戻らなければ。
「三上、私はもう行きます。飴が溶ける前に、主人のところに行かないと。紗綾様がお待ちです」
「えー。何だよ、いいじゃん。女中が付いてるんだろ？」
「戻ります。またあとで」
「当主になれないかもしれない紗綾様に仕えて、楽しいか？」
「……は？」
富樫家を受け継ぐのは、代々直系の男子と決まっている。複数の

場合は長男。長男が亡くなった場合は順番で。紗綾には二歳年下の綾人(あやひと)様という弟がいるが。

「知らなかったのか？当主はお認めにならないらしいから、公式なものじゃないけど。紗綾様は身体が弱いから、もし紗綾様が当主になっても跡継ぎが残せるかっていう問題が出てくる。それで、周りから次男の綾人様を特例として時期当主に据えようっていう話があったんだぜ。去年の祭りで、そーゆー意見も結構減ったらしいけどな」

知らなかった。でも。

彼が知らないなどということがあるだろうか。次期当主としていろいろな人と会い、視てきた彼が。気づかないということがあるだろうか。

そんなはず、ない。

紗綾は、俺が今まで見てきた限り、一度も人の想いを視落(みお)としたことはない。

じゃあ紗綾は、それを自分一人で抱えていたことになる。俺に相談せずに、たった一人で悩んでいたかもしれない。そうであったとしたら、俺は御付(おつき)失格の大馬鹿者だ。

「――帰る」

三上に背を向け、林の中を抜ける。ここは俺の領域。万が一にも、三上は追いつけない。たとえ俺が下駄だとしても。

「どうしたんだい、高田くん。ずいぶん早く帰ってきたね。てっきり誰かに捕まっているものだと思ったけれど」

息を切らしたまま、縁側から直接部屋に入る。簾(すだれ)を上げたときに紗綾が眩しそうに目をつむった。

「ほら、飴」

紗綾を直視できない。直視すれば、彼は俺の心を読んでしまう。

顔を背けたまま紗綾にみぞれ玉の入った袋を渡す。

「あ、私(わたくし)は、ここで、失礼します」

女中さんが部屋から出て行った。沈黙が流れる。何を話せばいいのか、分からない。どう切り出せばいいのか、分からない。悔しさだけがつのっていく。

唐突に紗綾が。

「高田くん、君、何で泣いてるんだい？僕が次期当主を継げないかもしれないと知ったからって、君が泣くことはないだろう」

「泣いてなんか」

ないと思った。でも、気づけば頬が濡れている。そして、疑問が浮かんだ。顔を見られるのも構わずに紗綾のほうを向く。

「どうやって、俺の心を読んだ」

「簡単なことさ。僕に言いづらそうにすることなんて、みんな一緒。去年なんか特にそうだったな。祭りのとき、一部の人間が僕に対して引きつった笑みを浮かべた。分かりやすいね。それで、心を読ませてもらって、僕が次期当主になれないかもしれないことが分かった。砂糖菓子で作ったお城より甘く優しい君のことだから、誰かからそれを聞いて、聞くに堪えなくなったんだろう。そして、走って戻ってきたのはいいが僕にどう話しかければいいのか分からないから、とりあえず心を読まれないように顔を背けた。ただの暇つぶしの推理だよ」

「何で、泣いてるって」

「涙は匂いで分かるよ。夏は乾くのが早いだろう？特に匂いが分かりやすくなる」

紗綾の手が伸びる。そばにあった新しい手拭いを掴み、ずいと俺のほうに押し出した。ぷるぷる震えているところからみて、腕を上に上げようとしているに違いない。手を貸して浮かすと、手拭いを俺の顔に放り投げた。予想外の展開にまともに手拭いをくらってしまう。

「君の泣いた顔は面白くない。いつも通り怒るか笑うかしてくれ、調子が狂う」

「……何それ、けなしてんの」

「褒めてるんだ。珍しいことなんだからありがたく受け取れ」
自分で自分が褒めることを珍しいというとは。
俺は思わず吹き出した。そのまま顔を拭い、また紗綾と顔をあわせる。気恥ずかしくも笑って見せると、紗綾は満足げに頷いた。
「紗綾は良いのか？こんなに束縛された生活送ってきたのに、結局次期当主になれませんでしたって言われても」
俺は嫌だと思う。だって、もしそうなったら。
俺の心の中に気づいているのかどうか、寂しげに彼は言った。
「僕は、もし出られたとしてもこの身体だから。どうせ寝付いていたさ。すでに死んでいたという可能性だってある」
「死んっ……」
そうだ。彼は自分の命を、身体を、心を、どうでもいいと思うという悪癖があるのだ。
他人のそれらは、自分に代えても守るくせに。
「ないと思うかい？僕は他人に比べれば、そうだな……蜉蝣（かげろう）みたいなものだよ」
カゲロウは羽化してからの命が、数時間、そして長くて二・三日。
せっかく外界に出られたとしても短い間しか生きられない。そんな、自分への皮肉なのだろう。
「巧（うま）いなんて言わねえぞ」
「言われるつもりもないさ」
紗綾が大きく息をついた。疲れたのだろう。汗がにじんでいる。もう一つ新しい手拭いがあったので汗を拭う。手をまた布団の中に戻そうとすれば、逆に手をつかまれ、じっと見つめられた。
「何だよ、水がほしいか？つか、まだみぞれ玉食ってねえじゃん」
ただただ、紗綾は俺を見ている。
「何なん――」
「僕が今何を考えているか、当ててみるといいよ。当てられなかったら罰ゲーム」
いきなり、何を言うのか。しかし、紗綾はあくまで本気だ。当て

なければ、罰ゲーム。
「えー、んー、あ！外に、出たい」
さっき言っていたではないか。自信満々で答えれば、呆れたように眉を上げる紗綾。
「違う。はい、罰ゲーム。話を聞いてもらうよ」
「でも、お前、疲れてるんじゃ」
俺の言うことに聞く耳も持たず、紗綾は話を始めた。
「僕がぐずぐず生きてるから悪いんだねえ。いっそ死んでしまえばいいと思うのに。そうじゃないかい？僕が生きてるから跡継ぎ問題が起きて、富樫家がぐらつく。お父様やお母様もいちいち気を遣わないといけない。綾人（あやひと）も僕と比べられる。君だって」
何を、言うのだ。
「高田家は昔から富樫家に仕えてきて、長男が富樫家の跡継ぎの御付（おつき）になるんだよね」
確かにそうだ。俺は高田家の人間、しかも長男だから、自動的に次期当主にお仕えすることになる。
「僕が死んでしまえば君はさっさと綾人に仕えられるのに」
紗綾が死んでしまうと、俺は綾人様に仕えることになる。そうだ。
「さっき君は『紗綾が次期当主にならなくなったら、綾人様に仕えることになる』って思っただろう」
思った。しかし、それは。違うんだ。何で分からないんだ。
「君は優しいから、僕に負い目を感じるんだね」
違う。いつもぴたりと真実を当てるのに。彼は何を言っているんだ。俺は、負い目を感じるわけじゃ。何で分からないんだ。
「でも、僕が死んでしまえば」
戯言（ざれごと）も、いいかげんにしろ。
「――――」
「は？」
彼が聞きなおす。聞こえなかったのか。もっと小さい音は聞こえるというのに。

「馬鹿だ、紗綾は本当に馬鹿だ、ふざけんじゃねえ、死ぬこと前提かよ、死ぬなんて軽々しく言うなよ、死ねばいいなんて、自分のこと、言うなんて、そんなの」
暑い。熱い。夏の暑さに、ますます目頭が熱くなって。
「俺は、一人にしか、仕える気は、ねえよ。紗綾にしか、仕えたくない。お前が死んだら、そんなこと、考えたくねえけど、俺は」
声がつまる。主人（あるじ）である紗綾の言いつけを守れない俺は馬鹿だと思う。泣くな、笑うか怒るかしろと言われたのに。怒ってもいるが、泣いてもいるなんて。
「高田家を出る」
この一言は、はっきり出た。
紗綾が、目を見開いた。
「何を言っているんだい。それに、泣くんじゃないと言っているだろう？」
紗綾の命令だ。なのに、涙を止められない。しまいに俺は、嗚咽を漏らして泣いていた。掴んでいた紗綾の腕はやはりとても細くて。少し力を込めれば霞（かすみ）のように消えてしまいそうで。そんな儚げな存在が、誰よりも優しく強いのだと知っていて。それがずっと在ってほしいと願っている自分を知っていて。
「俺は、俺は、っ」
言わなくても、彼は分かるのだ。掴んだ腕の手が、子供をあやすように規則的に俺の腕をぽんぽん叩いた。小さい頃にかえった気がした。怖い夢を見た子供のように。俺は、泣いた。
どれくらい経っただろうか。
涙がやっと止まる。冷静になる。自分の行動を省みる。紗綾の規則的な動きにつられて、頭もよく働く。
「あ、涙止まった。もう大丈夫かい？高田くん」
つまり、俺は、五歳も年下の紗綾にあやされていたということになる。中一の男子が。
「……ごめん、もう大丈夫、あ、ありがとう」

真っ赤になってやっとのことで声を出す。穴があったら、入りたい。
「別に。綾人もお父様に怒られたら僕のところに泣きに来るよ。君もいつも見ているじゃあないか。ただ、感情が抑えきれなくなっただけ。人間なら誰だってあることだよ。謝ることない」
俺は、五歳児と同一視されているらしい。
でも、いつも通りの紗綾だ。
「そうだな。――紗綾、疲れてないか？」
「いや、お腹すいた。君、お祭りで何か買ってきただろう？そっちを食べるよ」
そうだ、わたあめ。
「やべ、溶けてねえかな。あ、大丈夫だ。紗綾、りんご飴とわたあめがあるけど、どっち食べる？」
「わたあめ。りんご飴は君が食べたまえ。あ、一口ほしいかもしれないが」
「どっちだよ」
わたあめを出す。一口大の大きさに取り、紗綾の口に入れた。自分の口にも入れる。それをしばらく繰り返した。
「他には何を買ってきたのかな。見てみたい」
紗綾が、笑ってそう言った。仕えてきたから分かる、彼の本当の笑顔。紗綾は本当に笑うとき、判別できるぎりぎりのところまでしか口角を上げないのだ。
「ほら、お面。かぶっとくとお祭り気分だろ。それに、かざぐるまだろ、それに……」
「ははっ、本当に。お祭りに行ったみたいだ。僕がほしいと思うものばかりじゃないか。これも一種のお祭り気分だな」
ざらり
「？それは」
黄色いネット。中には様々な色、様々な大きさの玉。
「ビー玉。好きだろ、紗綾」

開けて、中身を彼の手の上に乗せてやる。
こぼれた。
畳にころころと広がるガラス玉。
「いけね、今拾う」
「いいよ。このままにして」
「なんで」
「高田くんも横になれば分かるよ。やってみるといい」
つまり、横になれということか。言われたとおり、紗綾の視界の少し下で横になる。
「わ」
「ね、高田くん。綺麗じゃないかい？だから、このままでいいよ」
ビー玉が、簾の隙間から差す陽を反射してきらきら輝く。ビー玉自身は、外の景色を映し、自分の中に閉じ込めている。
なんだろう。幻想的だ。
「さっきの、僕の発言を訂正する」
いきなり彼は言った。
「今僕は蜉蝣（かげろう）だけれど、いつかあのビー玉みたいになりたいと思う。生きる時間はもっと短くなる、映す景色は一瞬でしかないけれど、それでもいい。誰かに覚えていてもらえるような、忘れられないような綺麗なものを残したい」
ねえ？高田くん。
彼は俺にそう問うた。
――そんな、簡単なことか。
――もう、叶っているじゃないか。
――紗綾に仕えて、俺はもう紗綾から。
――忘れられないくらい綺麗なものをもらったのに。
俺の心を読んだのだろうか。
熱に浮かされていただけだろうか。
紗綾は、頷くようにゆっくりまぶたを閉じた。

蜻蛉は水になりたい（1）

「おい、ツカ」
「はい、何ですか？高田先輩」
「子供のころ、何になりたかった？」
「は？」
いきなり先輩はそう話しかけてきた。意図がまったくつかめない。
「だから、子供のころの夢だよ、ゆめ。まさか何にもなかったわけじゃないだろ。お前だって子供だったんだし」
にやりと悪そうに笑う彼。
「はあ……確か、警察官、だったような気がします」
記憶なんてはっきりしていない。だが、ずっと警察官になることを考えていたから、きっと子供のころの夢もそうだったのだろうと推測しただけだ。
「そーかぁ、ちっさいときから警察官（サツ）になりたいとは」
車の中で声を立てずに笑う先輩。今から会いにいく彼ほどではないが、いい教育を受けたのだろう。一見がさつに見える動作の一つ一つに、隠れた優美さが見える。
「俺がちいさいときなんて、夢見ることも許されなかったからな」
「え？」
「生まれたときから富樫家に仕えることを前提に教育されてきたから、『将来何かになりたい』なんて考えもしなかった」
ごく自然に、当たり前のように先輩はそう言った。
何も言えなかった。

「紗綾ー。具合どうだ」
「なんだい、会えばいつもその台詞だね。君にはそれ以外の言葉を考える頭がないのか」
「はい、分かった。あとで医者に聞いとく」

富樫がベッドの上で片膝を立てて座っていた。初めに会ったときよりも痩せた気がするのは気のせいだろうか？俺が見ているのに気づいたのか、彼は俺に笑いかけた。すべてを見透かし、沈黙させてしまうような目で。

「おい、紗綾。今って安静時間じゃないのか？お前も安静にしてろよ」

いつ来ても綺麗に整えられている髪をぐしゃぐしゃと撫で、心配そうに元――いや、「現」か――富樫紗綾の御付は言った。当の富樫本人は迷惑そうに頭を振って手を遠ざけ、にらみつける。

「五月蠅（うるさ）い。聞きにいくならさっさといきたまえ。僕はその間、ツカさんと話でもして待つとしよう」

ひらひらと高田先輩の前で手を振り、病室から追い出す。死刑囚である富樫が警察官の高田先輩に。普通ならありえないことだ。主従関係を結んでいるからだろうか？

「話すのはいいが、ちゃんと横になってろよ！」

富樫に一言念を押して、先輩は出て行った。

主従関係――いや、そんな単純なものじゃない。長い間共にいて、同じ時間を共有して、同じ気持ちを分かちあって、ほかにもいろんなものが混ざり合ってできる、硬く強い……

「絆って言いたいんですか？」

「ふええっ！ひ、人の心をたやすく読むな！」

「絆じゃありませんよ。信頼です。幼いときに交わした誓い。あのころはお互い、夢は違いましたが思いは同じでしたから」

夢？

先輩は、夢なんか見たことがなかったのではなかったか？

「教えてあげましょうか？」

富樫が悪戯（いたずら）っぽく微笑む。

頷いてしまったのは、ただの気まぐれなのだ。そうだ。

＊＊＊＊＊

「何やってるんだい！日本に帰ってきて早々に喧嘩（けんか）か。それも、わ

ざわざ怪我まで負って」
留学先のアメリカから帰ってきて二日目の夕方。言葉のとおり、高田くんはひどい怪我を負ってきた。大半は擦り傷なのでたいしたことはないが、そのままにしておくのはいけない。救急箱を取ってきて、傷をひとつひとつ手当てしていく。不機嫌そうな仏頂面からして、何か酷(ひど)いことを言われて激昂したのだろう。すべての怪我を手当てした後でも、眉間に深く刻まれた皺は戻らない。こめかみを押さえてため息をつきそうになるのを堪(こら)え、事情を聞く。
勝手に心を読むなんて真似はしない。彼には、決してそんなことを、したくない。
「誰と喧嘩したんだい」
「……」
少し脅しをかける。
「言わないと、勝手に心を読ませてもらうよ」
「――そこらの不良(チンピラ)だよ。ただの手慣らしだったんだが、数が結構多かった」
嘘だ。
彼は嘘をつくのが得意だが、僕に対してとなると滅法(めっぽう)下手になる。
「それで？どうしたんだい」
「どうにか全員を伸(の)して帰ってきた。もういいだろ、この話題。俺恥ずかしいから」
恥ずかしいんじゃない、悔しいんだ。
――村人、だろう。彼が喧嘩をしたのは。それも村人からの一方的な仕打ちだ。高田くんの手は熱を持っていなかった。一人でも投げ飛ばせば、殴れば、手に熱がこもる、が、いつもと変わらない。
きっと、こんなことがあったのだろう。
高田くんが外から戻ろうとしたとき、村人がよってたかって石や土を投げた。そして、言葉を。抵抗しなかったのだから、僕のことだったに違いない。高田家は僕たち富樫家を汚すようなことはできない。自分の家がどれほど汚されようと。高田くんはじっと耐え続

けたのだ。
馬鹿馬鹿しい。
僕のために動かないなんて。
家のために動かないなんて。
「――はいはい、もう聞かない。そろそろ晩御飯だし、着替えておいで」
「おう」
それを黙認してしまう、僕も僕なんだろうけど。
「紗綾様」
母屋からの呼び出しがあったのは高田くんが着替えに部屋を出たとき。用件は、うんざりするくらい聞きなれた『家』のことだった。

蜻蛉は水になりたい（2）

「参りました」
「入っておいで」
「……はい」
母屋はあまり得意じゃない（と言っても、ろくに来たことがないので何ともいえないのだが）。お父様の威厳、いや、威圧がのしかかるような錯覚を起こすから。それ以上に。
僕、この富樫紗綾自身が『富樫家』の恥だと否応なしに認識させられるからだ。茶色の髪、青みがかった鳶色の瞳、西洋風の顔立ち、そして身体の弱さ。どれだけ頭が良くても、運動神経が良くても、家督を継ぐに値する以上の能力を持っていても、古来からの崇高な天皇家に異人の血が混じっている――馬鹿げたことでも、そうなのだから仕方がない――ことは、一族にとってこれ以上ない恥だ。しかも、そんな人間が次期当主なのだから。
下（しも）に座り、お父様を真正面から見る。お父様のうわべだけの笑みを直接受ける。分かる人にしか分からないが、お父様は僕を値踏みしているのだ。あの穏やかに細められた眼の奥で。
「帰ってきて早々に悪いね。今年の祭りのことで、しなければならないことがあるから。もう少し待ってくれるかい？綾人（あやひと）がまだ来ていない」
綾人。僕が最後に見たのは彼が三歳のときだ。今は五歳。僕のことを覚えているかどうかも疑わしい、微妙な時期に僕は空白をあけてしまったものだ。
「綾人は勉学とか運動とかにおいては紗綾に劣るけれど、芸能は上（う）手（ま）いよ。紗綾と互角だ。あと、人見知りをしない子だからきっとすぐ仲良くなれるさ」
お父様がそこまで言ったところで、急いで廊下を走る音。子供の軽い足音だ。擬音語にするなら『てててっ』が一番似合う。

「し、失礼します！」
普通の、何処にでもいるような少年の声。僕のやけに大人びた声音とは大違いだ。
「こら、綾人。廊下を走ってはいけないと言っているだろう？」
「ごめんなさい、お父さま。これから気をつけます……」
「紗綾の隣にお座り。綾人は覚えているかな、なんたって最後にあったのが三歳のときだからな……」
「覚えてます！ぼくが道で転んだとき、慰めてくれました。……よね？兄（にい）さま」
僕のすぐ脇に綾人が座った。顔を覗き込んでくる。
黒い髪、黒い瞳、純日本人の顔、細身ではあるが健康そうな体。まさに一族が望む姿だ。純粋で、疑うことを知らない子供の目。少しうらやましいと思ってしまう。

ああ、そうなのか。

僕や高田くんが嫌がられる理由が分かった。
富樫家の一族は、富樫紗綾（ぼく）ではなく富樫綾人（おとうと）を次期当主に据えようとしているのだ。
好都合なことに僕は身体が弱いから、跡継ぎが残せるかどうか分からない。仕方がないが特例で、などともっともらしい理由を付けて。
そして、教育を受けてこなかった綾人は何かと分からないこともあるだろう、と相談役を買って出るのだ。運良く相談役になれれば、あとは自分の思いのまま。ちょうど富樫家は（表には出なくても）天皇家。まさに摂関政治といえる。
「じゃあ話を始めようか。二人とも、特に綾人。きちんと座りなさい」
兎のように機敏な動きで綾人は正座をした。
「今年は大祭の年だ。この年には富樫家が神楽を舞う。大体家の中

で一番の名手が舞うものなんだが、今回は二つに意見が分かれてね。紗綾に舞わせるという案と、綾人に舞わせるという案が出てきたんだ。この上ない機会だからぜひやってほしいんだが、どちらがするかというのが問題でね」

この神楽は、神降ろしを行う。神降ろしとは字のごとく、神をその身に降ろすことだ。

正直言って、勘弁してほしい。

でも。

「綾人には、負担が大きすぎませんか。神降ろしは、身体に大きな負担がかかる」

「そうだね、紗綾。でも、それはお前も一緒だろう？お前の身体の弱さはある意味で筋金入りだ。しかし、やはり紗綾は優しい子だね。自分も勘弁してほしいと思っているのに、弟のために自分を犠牲にするんだから」

「――！」

心を、読まれた。

「っ、それ、は」

「言いつけの守れない子だ。それくらいで心を砕いているようじゃあ、頭首（ここ）にはいつまでたってものし上がれないよ」

人など、踏み潰していけ。どんな人間も――たとえそれが肉親であっても――邪魔なら消せ。自分の懐に入れ込め。再起不能にしろ。

それが、富樫家。

裏を統べる、天皇家。

「……お父さま？」

「ああ、ごめんね、綾人。どうする、お前はやりたいかい？」

「やってみたいです！」

何も知らない、綾人。

妬ましい

「……紗綾」
鬼の声だ。僕を生まれたときから追い詰める、お父様の声。
「具合が悪いのかい？でも、答えてくれ。やりたいのか、やりたくないのか」
（紗綾――？）
かすかな声がして、はっとした。高田くんが、僕のことを心配している。彼のことだから、たとえお父様の目の前であろうと僕を引っ張り出して床に着かせるだろう。前にも一度あった。
あのあと、高田くんがひどく打たれたのを知っている。
「やります。具合が悪いわけでもありません。ご心配をおかけして、申し訳ありません」
選択肢なんて、はじめからない。
僕は深く頭を下げ、丁寧に言った。
「よかった。じゃあ、明日の朝。どちらの舞がいいか判定してもらうとしよう」
奥から現れてきた人は。
「富樫家の白拍子に」
綺麗に整えられた金髪。真っ白な肌。そして、蒼い瞳。
「お母さま！」
「……お久しぶりです、お母様」
僕の、そして綾人の、母だった。

蜻蛉は水になりたい（3）

「明日の朝までに、舞を完璧に舞えるように。今からでも間に合うだろう？」
「はい、承知しました」
「がんばります！」
しかし、明日舞の判定があるといっても、僕はあの地獄のような坂を上がった離れに帰らなければならない。まあ、あすこのほうがこんなぴりぴりしたところよりもいいのは確かなのだが。
「では、失礼します」
「頑張れ」
僕の考えを読み取ろうとするかのような目つきに、全てを遮断して静かに障子を閉めた。
「さあ、帰ろうか、僕らの居場所に」
高田くんを連れて母屋を出る。
もう随分と暗くなっていた。夏とはいえ七時ともなると先がよく見えない程度の暗さになる。
「おい、紗綾。負ぶってやるよ」
「いやだね、怪我人に負われて、逆に怪我なんかしたら笑えない」
「ひっど。そんなに深い怪我なんて負ってねえよ……心配してくれて、ありがとな」
僕に伸ばされた手を取る。手を握って帰るなど、子供らしい。しかし、高田くんとなら別にいいかとも思えた。
そのときだ。
「！紗綾」
「高田くん！」
乱闘。
この急な坂道で。
妖の面をかぶった男が数人、僕らの前にあわられた。

「はっ、面妖なやつ。あ、これ、駄洒落だぞ」
「ぐだぐだ言ってないで倒したらどうだい」
高田くんも倒すが、僕もうかうかしてはいられない。基本的に男たちは僕を狙っているのだ。
逃げる。地面から地面を、木から木を。
そして呼ぶ。ピューイと不思議な音を立てる。僕の遣いを呼んだのだ。基本的には物を運ぶのに使っているが、戦闘にも十分間に合う、遣い。
「鴉か」
男の一人が呟いた。それとほぼ同時に、黒い塊が男たちに襲い掛かる。
言葉どおり、鴉だ。ガアガア騒ぐ、あの鴉。鴉は人の言葉を解するという。実際、僕の言うことはよく聞いてくれるいい子達だ。
「何ですか？あなたたち」
鴉につつかせながら、聞く。答えない。
「もっと」
うめき声を上げだした。痛いのだろう。なんといっても何十羽もの鴉につつかれ、しかもその強さが増していくのだから。
「もう一度聞きますよ。あなたたちは、誰ですか？」
答えない。無言の意思表示を汲んだのかどうか、鴉たちはつつく強さを強めた。血が流れていく。ここからは分からないが、きっと肉もえぐられていることだろう。
「最後に聞きますよ。誰の差し金ですか」
「――――――誰って」
「誰って？」
次の台詞で、襲い掛かってくる。
「言わねえに決まってんだろ！！！」
来た。
「っと、ダメですね。心で考えちゃダメだ。僕はこれでも次期頭首ですよ？読心術くらい心得てます」

分かっているものを避けるのは、簡単だ。しかし。
「紗綾！」
一筋の閃光が、きらめいた。
よけら、れない。
後ろには鴉たちがいる。もしあたってしまったら。
そんなことを考えているうちに。
「つ、うぅ」
深々と、僕の足に突き刺さった。足の付け根に近いところ。
「紗綾、おい、足」
高田くんの集中が僕に向く。
「ダメだ、高田くん！その男から目を――」
男は、その機を逃さず、走り去っていってしまった。
「逃げたもんはしゃーないだろ」
都合よく諦め、高田くんが僕に走りよる。
「とりあえず矢が栓になってくれてっけど、このまんまはやべえぞ。とりあえず、もう少しだから離れ行こう。歩ける……わけないな」
ふわり、血が逆流するような。
「なにやってるんだい、僕は歩くから」
「無理してどうする。黙って抱っこされとけ」

「おい、やぶ！仕事だぞ」
「やぶっていうの止めてあげなよ」
離れについてすぐ、先ほど高田くんのために呼んだ医者が引っ張り出された。一度名を聞いたことがあるが、忌み名しか持っていないと教えてもらえなかった、若い男だ。僕はとりあえず、忌み名とそのままよんでいる。
「おやおやあ、紗綾様。これは大変まずいよ、まずいまずい」
忌み名はさして緊張感もなく足の処置をし始めた。矢を抜くと血がごぷりとあふれ出す。異様に白い太ももを伝い落ちていく。
それを。

忌み名は。
「おい、やぶ、刻まれてえのか」
舐めた。
「んー？代金代金。富樫家の血はなかなかに美味しいんだよ？紗綾様、もう少し舐めても？」
とんでもない変態だ。
「それで、明日動けるようにしてくれるなら」
「了解了解」
れろ、と官能を誘う舌使いで、また舐めてくる。こっちの反応をうかがっているのだろう。
「余談だけどね、僕、実は自分で反応するかしないか選べるんですよ、忌み名」
「なんだなあんだ、つまらない」
「いいから血ィ舐めんのやめろ。……血が、止まってねえ」
高田くんの顔が蒼い。握りしめられた手の関節が白く浮き上がる。
「何で僕じゃなく高田くんが青ざめるんだい——大丈夫だから心配しないでくれ」
「もう、分かった分かった。ごちそうさまでした。代金はいただいたので、処置します」
でも——と言葉は続く。
「明日は安静にしていてほしいんですけどね」
「無理です」
「紗綾様のことだから、熱出ますよ」
「別にかまいません」
「おい、紗綾」
処置を手伝いながら、高田くんは。
「俺、今から母屋に行って、試験を延ばしてもらいにいく。だから明日は安静に」
分かっていない。高田くんは僕のお父様のことを。
「無理だよ。却下されるに決まってる。だから、いいんだ」

「でも「高田くん」
高田くんの背筋がす、と伸びる。
「命令だ、行くな。君は僕の隣にいればいい」
しん、と静まり返った室内。時折処置中の、金属と金属が触れ合う音がする。
「ふう、終わった終わった。どうなっても知りませんよ？紗綾様。念のためについていきますけれどね、きっちり母屋にも報告しますからね」
「……ええ」
僕は、小さくうなずいた。

蜻蛉は水になりたい（４）（前書き）

また一ヶ月更新――が、頑張りますもん。

蜻蛉は水になりたい（4）

確かに、な。
歩こうとするだけでズグリと傷がうずく。
「――っ」
母屋までどうにか歩き、高田くんが少し離れたとき、思わず息を吐き出した。
共についていた忌み名が、耳元でささやく。
「絶対ばらさないつもりなんですね、紗綾様は。なんて」
残酷な方なんでしょう。
甘く響くバスの声には、明らかに非難の響きが混じっていて、僕は目を細めた。忌み名に事実を言い当てられるのはこれで何度目になるだろうか。いつもいつも、彼は僕と高田くんのことについては完璧にあてる。
「それが、どうかしましたか？僕は残酷です。事実だ。言い訳も、弁明する気も、僕には一切ない。僕は残酷なんです。それこそが――」
「富樫家なのだから？」
「分かってるんじゃあないですか。それ以上のことを言うつもりはありませんよ。首を突っ込むのはおよしください。僕は、あなたを気に入ってるんですから」
何も言わず、笑みだけを残して離れていく忌み名。
音も立てず、僕らの前に現れた高田くん。
「来い、とさ。容赦ねえよな、本家って」
「ああ」
そんなの、分かってる。
＊＊＊＊＊
「え、ちょ、ちょっと待て。このフラグおかしい」
「何が、ですか？」

「だって、このままじゃ、あんた」
「怪我を負ったまま、僕は舞を舞いましたよ。そこもちゃんとお話しますから、とりあえず座ってくださいな。立ってられてはこちらが落ち着かないので。それに、ところどころ僕が語れないところもありますし――と、噂をすれば、ですね」
いつの間に、という表現が最もふさわしい。高田先輩はドアのところに立っていた。後ろに若い男を連れて。
「ほら、そこにいる若作りした男が忌み名ですよ」
「はあ、……ぁぁぁぁぁぁ？嘘、うそ」
「若作りなんて言わないでくださいよ、紗綾様。勘弁勘弁。そんなに反抗的だと、治療しませんよ？」
目の前の若い男――忌み名と言えばいいのかどうか分からないけれども――は、見た目にそぐわない古臭い笑みを浮かべた。というか、
「胡散臭い笑みでしょう」
「だから人の心読むなって……」
「私は実際若いですよ。まだ――あれ、いくつでしたっけ」
「やぶは無視すればいいんだよ、俺が物心ついたときからこの姿でいる化け物なんだから」
高田先輩が富樫に近づき、額をあわせる。ごくごく自然な動作だ。冷静に考えればおかしな光景だが、この二人では何の違和感もない。
「このごろ熱が下がってないんだろ。それによる食欲の減少。前会ったときより痩せた。これ以上痩せたら許さないぞ」
「大丈夫だよ。体重は危険値まで達していないし、このごろはちゃんと食べてるし。今の僕はあのときの僕ほど体が弱いわけじゃないんだよ？」
「いんや。空元気はいらねえ。さっさとここからずらかるためにも、さっさと元気になれ」
「御付が主人に命令かい？」
「お願いだ」

「……」
しぶしぶといったように布団にもぐりこむ富樫。高田先輩には弱いのだ。
何故、この二人はこんなにも、互いを信じきり、依存しきっているんだろう。
「じゃあ、高田くんが話してあげてよ」
「何を」
「神降ろしの祭り。の、神楽を舞うのはどちらかっていう試験を行うところから」
「おま、っ。ツカに何喋ってんだよ」
「僕らの軌跡、ですかね」
「――なんで俺が」
「診察を受けろっていうのは君でしょう。だったら、楽しくおしゃべりしていたツカさんのためにも話してください」
うっ、という音と共に先輩のつりあがっていた眉がさがる。見事にハの字型だ。
「見事だねえ、見事。紗綾様は、いや、本当に見事な方だ」

「じゃあ、紗綾。また来るから」
「もう来なくていいよ。君の説教は長いんだ」
「来ないと寂しいくせに何言ってる。みぞれ玉買ってくるから」
「それならすぐ来るんだな。一日おきに来るといい」
「現金なやつめ」
結局先輩の口から過去が語られることはない。
「帰るぞー。ツカ、車出せ」
「あ、ちょうどいいちょうどいい。高田くん、私を家まで送ってください」
後ろに、ぴったりと。
忌み名が張り付いていた。
「うわ、何でだよ。通り道でもねえのに」

「まあまあ。家といっても、私の家よりは近いところに行ってほしいんですよ？分かりますかねえ」
意味深な忌み名の言葉。
「てめえ、まさか――なんて、雑魚キャラな台詞は吐かねえぞ」
「惜しいですね、ここで私は『ふふふ、そうですよ――』みたいな台詞を言いたかったのに。まあ、ご想像通りですけど」
想像もできてないんですが。
「連れて行ってくれますか？」
「どこにっすか」
「どこにって、もちろん決まってるでしょう」
「「富樫家」」
先輩と忌み名の声が合わさったとき。
俺は久しぶりに鳥肌が立った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9192r/

硝子細工と駄菓子達

2011年9月25日08時01分発行